



平成22年2月8日

卓話 『女 優』

女 優

水谷 八重子 様



「女優」というお芝居がございます。北条秀司先生が、当時、水谷良重だった私にあててお書き下すった、松井須磨子さんのお芝居です。でも良重じゃあ主役は無理だからということで、母との共演で2人の女優の物語に書き直されました。これは北条先生からいただいた最高の贈物と受け止めております。坪内逍遙と島村抱月が袖を分かったとき、島村抱月に付いた水谷筑紫の八重子を子役に使おうということで、松井須磨子さんの膝に抱かれて舞台に登場したのが母の女優人生の始まり。ですから私の先祖は松井須磨子さんという思いが半分あるんです。

新派は政治思想を広めるために角藤定憲が1888年に旗揚げした演劇。それが昔からある歌舞伎に対して新派ということになります。その角藤定憲を追って旗揚げした川上音二郎がアメリカで興業してみたら女形が通用しない。そこで急遽、彼の奥さんを女優に仕立てます。この奥さんは日本橋から奴^{やっこ}という名前で出ていた芸者さんで、それに本名の貞さんをくつ付けて貞奴。それが当たってサンフランシスコからニューヨークまで興行を打ち、さらに1900年のパリ万博で公演を打って、貞奴さんの人気が花開いた。ですから女優の一番のご先祖様は貞奴さん。私は、私のルーツの中に、松井須磨子と川上貞奴の2人がいるんじゃないかと思っています。

監督の山田洋次先生が小津安二郎の世界を新派に書いてくださって、今年のお正月、「麦秋」というお芝居を演じておりました。チッキという言葉や、上から吊るした電気の球の

横から電線を引張ってアイロンをかけたりという、昭和29年ぐらいまでの風俗をお客様が懐かしがってくださいました。こういう生活の匂い、日本人の足跡を、お芝居に残して行くのが私たち劇団の務めではないか、そんなふうに思いました。

私は子供を持った経験も失った経験もございません。息子は戦争に行つたけれど絶対生きている。いつかは帰ってくる。そう信じているおばあちゃんが「尋ね人の時間」をラジオをかけて聞くんです。それを後姿でっていう山田先生の演出。後姿でどこまでお客様に伝えられるのか不安でしたが、中日を挟みまして急にラジオしか聞こえなくなりました。明日引っ越しをしてしまう。どうか今、息子の名前を呼んでくれっていう祈るような気持ちで、お客様が全然、意識の外になってしましました。それから千秋楽を迎える1週間ぐらい前、突然怒りがわいてきたんです。可愛い息子が何でもぞ取られてしまうのか。戦争に対する怒りで体が震える。そんな自分の気持ちが、いえ「間宮志げ」という、私のやっていた役のおばあちゃんの気持ちが変化したんだって思います。素晴らしい作品から自分の経験したことのない感情を教えていただいて、人間的にも何か一つ成長できたんではないか、そんな思いをしております。

ご静聴ありがとうございました。

